

伊豆大島の天然記念物 カラスバト



伊豆半島の南東に位置し、太平洋に浮かぶ伊豆大島(大島町)。ここにハト科の天然記念物、カラスバトが生息する。カラスバトを守るため、約100キロ北に位置する都立国分寺高校(国分寺市新町)の生物部カラスバト班の生徒たちが生息を研究している。

カラスバトは国内では伊豆諸島や沖縄などの島嶼部に生息し、環境省のレッドリストで準絶滅危惧種に指定されている。体長40センチほど、全身は黒い羽に覆われ、尾羽が長く伸びた姿は



伊豆大島に生息するカラスバト (市石博さん提供)

国分寺高生が保護活動

カラスに近い。一方、首から胸にかけては、黒色の中に緑や青、紫が混ざって見える構造色になっており、都会で見かけるハトのようだ。

縄張りを主張するときは低い声で「ウーワー」、警戒するときは「ガガガ」と鳴く。時折、高い声で「ペーロン」と鳴くこともあり、求婚を表しているのではないかと考えられている。カラスバト班の3年、



国分寺高校生物部のカラスバト班
3月25日、国分寺市新町(橋川玲奈撮影)

島内の都立大島公園動物園の飼育員に話を聞いた。それ以来、なぜ国分寺で伊豆大島のカラスバトなのか。部の顧問、市石博さん(64)が以前、島内の都立高に赴任していたことがきっかけで、国分寺高校生物部の合宿場所に大島を選んだ。自然豊かな島で何か研究できるテーマはないか探し、希少なカラスバトにたどり着いた。

伊豆大島の合宿では、カラスバトがどのような環境を好むかを調査する「環境嗜好性調査」を進めている。カラスバトは臆病な性格で、なかなか人間の前に姿を現さないことから、詳しい生息は専門家にもほとんど知られていない。カラスバト班の3年、高橋慧さん(17)は「カラスバトがどんな場所に生息しているかが分かれば、保護活動もしやすい」と解説する。

調査がある日は午前3時ごろ起床。5時半ごろには島内の林道に入り、2人1組に分かれ別々の場所ですぐ鳴き声を聞き、その数を数える。その数や頻度から付近に生息する個体数が推定できるという。録音したカラスバトの鳴き声を流して応答させる手法は、調査を進める中で国分寺高校が編み出した、効率的に鳴き声を聞く方法だ。

(橋川玲奈)